

紹介

藤井讓治著

『徳川家光』

徳川家光は江戸幕府初代將軍徳川家康を祖父にもち、二代將軍徳川秀忠を父として慶長九（一六〇四）年に生まれ、慶安四（一六五二）年に亡くなった。元和九年からその死までは第三代將軍の地位にあり、「生まれながらの將軍」、江戸幕府の組織・機構を確固たるものとした人物、家康を敬慕し日光東照宮を造営した人として広く知られる。

本書は徳川家光の四十八年の生涯を描いたものである。著者は「江戸幕府老中制形成過程の研究」（校倉書房、一九九〇）に代表されるように、近世前期の政治史において多くの研究を積み重ねてきている。本書は、その研究過程で得られた知見をもとにして従来の家光像とは異なる家光像を描いている。著者によれば、従来の家光像は家光の側の立場から家光を美化するものであり、また、江戸幕府の「正史」とされて

いる『徳川実紀』などの記述にも事実と異なる点があるという。このような誤謬を第一次史料によって正した上で家光像を描き、かつ家光を当時の政治動向の中に位置づけたことが本書の大きな特色である。

本書は家光の一生を以下の四つの時期に区分し、記述している。

第一期は慶長九（一六〇四）年から元和元（一六一五）年までで、家光の誕生から世継ぎ決定までである。ここでは、家光の世継ぎ決定時期を確定した点が注目に値する。秀忠・お江与方夫妻は家光よりその弟忠長を寵愛し、そのため両者に世継ぎ争いがあったことはよく知られている。この世継ぎ決定に関する巷説には、家光・忠長兄弟が家康に拝謁した時に、家康は家光を上座に、忠長を下座に座らせたことや、家光の乳人の春日局が家光を世継ぎとするように家康に直訴したことが知られているが、著者は、春日局が書いたとされる「東照大権現祝詞」（日光輪王寺蔵）や金地院崇伝の書状から、世継ぎ決定を元和元年末と結論づけている。

第二期は元和元（一六一五）年から元和九（一六二二）年までで、世継ぎ決定から

將軍宣下までの嗣子としての時期である。ここでは、家光の元服の過程や大納言任官、家光付の年寄衆・家臣団の形成や、多くの家臣が將軍襲職以前の家光にそれほど高い評価を与えていなかった点、家光の將軍襲職に向けての幕政の動向が描かれている。

第三期は、元和九（一六二三）年から寛永九（一六三二）年までで、將軍襲職から秀忠の死までの秀忠大御所時代である。將軍襲職については、『徳川実紀』で將軍宣下の時に出されたとされている宣旨の内、右近衛大将宣旨・淳和奨学の宣旨・隨身宣旨は後に作成されたことを指摘している。

ここでは、朝鮮通信使の拝謁、大名屋敷への御成など、家光が内外ともに新將軍として認知されるさまが書かれている。しかし、その一方で將軍家光ではなく大御所秀忠が寛永二（一六二五）年の領地朱印状を発給するなど、完全には家光へ権力が移譲されていなかった点を指摘している。この時期は、西丸秀忠付年寄と家光付年寄が併存した二元的な政治が行われていた。両者が幕府の意志決定とその伝達に関わることによって二つの権力間の矛盾の解消がはかられ、秀忠から家光への政権の実質的な移譲が円

滑化される過程が描かれている。

第四期は、寛永九（一六三二）年から慶安四（一六五二）年までで、大御所秀忠の死から家光の死までの「天下人」家光としての時期である。ここでは、大名統制や軍事・政治組織の確立を通して家光が「天下人」として権力を掌握していく過程、江戸時代の国際関係鎖国体制の作られるさま、家光の東照大権現家康への敬神、家光の死などについて描かれている。一般的に家光は若々しくたくましいというイメージがあるが、実はたびたび病にかかっている。特に寛永一四（一六三七）年から一五年前半にかけての病は幕府の政治組織を改変させるほどの深刻なものであった。家光は、寺社奉行・勘定奉行などの「職」をもうけ、それを家光自身が直轄する將軍諸職直轄制を寛永一二（一六三五）年に導入した。しかし、寛永一四（一六三七）年には、家光の病によって幕政が停滞したため、この將軍諸職直轄制は放棄され、將軍が管轄する老中が寺社奉行などの諸職を支配するという老中を中核に据えた政治組織へ改革された。

なお、この病は、家光が日光へ社参する

夢を見たところ本復した。このように、家康の神徳で病が本復することが数度に及んだことが家光の家康への信仰の理由の一つとして挙げられている。

以上、非常に多岐にわたる本書の内容の概要を紹介した。後世に作られた史料に基づいた家光像ではなく、同時代の史料に基づいた家光像が描かれ、かつ家光の一生が当時の政治動向の中に位置づけられており、本書は今後の家光研究の基本文献となるだろう。

(A5判 二五〇頁 一九九七年七月
吉川弘文館 一八〇〇円)
(東谷智 京都大学文学部博士後期課程)

受贈図書

(一九九六年九月一〇日)
一九九七年九月三日)

坂田隆著 古代の韓と日本(新泉社)

平尾透著 総合史観―自由の歴史哲学―

(ミネルヴァ書房)

渡辺信一郎著 天空の玉座 中国古代帝国

の朝政と儀礼(柏書房)

岡本明著 ナポレオン体制への道(ミネル

ヴァ書房)

小林道彦著 日本の大陸政策一八九五―一

九一四―桂太郎と後藤新平―(南窓社)

山本四郎著 日本近代国家の形成と展開

(吉川弘文館)

美川圭著 院政の研究(臨川書店)

長谷川高生著 大衆社会のゆくえ オルテ

ガ政治哲学・現代社会批判の視座(ミネ

ルヴァ書房)

野口鐵郎責任編集 選集 道教と日本 第

一卷 道教の伝場と古代国家(雄山閣出

版)

平田耀子著 ソールズベリのジョンとその

周辺(白桃書房)

佐藤彰一著 修道院と農民(名古屋大学出